

近藤清石著
山口縣史畧

長門國之中
五

庫文閣内			
函架	三册	三十六番	和書類

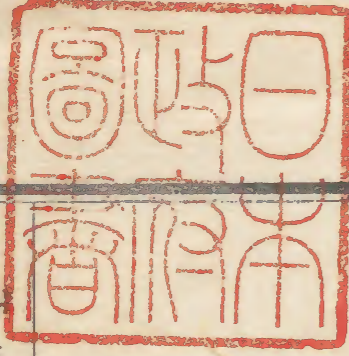
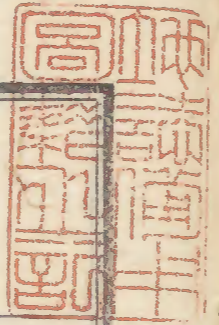
閣 4

内閣文庫	
番號	和 36540
冊數	6 (5)
函號	140 305

地 七 五



155



豐浦清末兩藩毛利氏略系

○毛利元就四男

○元清 少輔 四郎 治部大輔 伊豫守

備中 國小 下 田 郡 橫 谷 村 猿 懸 城 主 總 田

民部 少 輔 元 資 家 嗣 卒 于 安 藝 國 廣 島

○秀元 官 松 丸 右 京 大 夫 伊 豫 守

輝 元 斐 守 子 參 議 從 三 位 卒 于 江 戶 七 十

慶 安 三 年 閏 十 月 三 日 薨 于 江 戶 七 十

○光廣 又 四 郎 和 泉 守 卒 于 江 戶 三 十 八

兼 應 二 年 七 月 二 日 卒 于 江 戶 三 十 八

系之略 卷之五 一 傳古堂藏

元知

歲 權三郎 刑部 刑部大輔
從五位下
兼應二年十月十二日分封清未
天和三年閏五月十四日卒于江戸
五十三歲

綱元

右京 甲斐守 侍從
從五位下
實永六年三月朔日卒六十歲

元朝

後宗元 又四郎
實綱元男吉元子
正德三年為宗家吉元養子讓家叔
父元矩
那和仁八郎 右京

元矩

那和仁八郎 右京
實綱元末子
享保三年三月二十日卒十五歲以

匡廣

十七歲未滿家斷絶
初元平 從五位下
甲斐守 從五位下
享保三年四月十五日移封長府
享保十四年九月十九日卒五十七歲
初元明親就匡就 百助 主水正

師就

從五位下
享保十四年四月廿日卒于江戸三十

政苗

初匡平 竹之助 刑部少輔
讚岐守 從五位下
享保十四年十月廿六日分封清未
天明元年七月廿二日卒六十六歲

政美

初匡邦 匡訓 寅之進 讚岐守
從五位下
享保四年七月廿九日家督
天安永四年十月十一日卒七十二歲

政明

初正明帶刀十一日卒
實增山河內守正賢二男
文政元年二月廿九日家督
同六月廿四日卒三十歲

元世

初正名紀七郎讚岐守
從五位下
實堀田攝津守正敦六男
弘化二年七月廿七日卒五十歲

元永

健之助出雲守
從五位下
實毛利左京亮元運男
嘉永三年正月四日卒

元純

銀三郎讚岐守
實木下主計頭
身

匡敬

初元房後重就 岩之允 甲斐守
從五位下
實曆元年四月十二日讓家匡滿襲宗
家宗廣遺跡

匡滿

文之助能登守
從五位下
明和六年八月十三日卒于江戸二十
二歲

匡芳

初匡豐 政二郎 甲斐守
從五位下
實宗家重就男
寬政四年六月廿二日卒于江戸三十
五歲

元義

初元敬 直次郎 甲斐守
天保十四年四月七日卒五十九歲

○元運

雅之助

左京亮

從五位下 天保十二年九月廿一日家督
嘉永五年閏二月廿七日卒于江戸嘉

○元周

萬次郎

左京亮

從五位下 實元義男元寬子

○元敏

宗五郎

明治九年三月五日家督

山口縣史畧卷第五

山口縣士族 近藤清石 著

長門國之中

紀元二千五百廿五年

正親町天皇永祿五年九月十九日隆元本國

守護職ヲ兼補ス

江氏家譜
古文書

紀元二千五百廿五年

六年五月十六日隆元更ニ本國并ニ周防

守護職ニ補ス是ヨリ先キ既ニ守護ニ補

ストイハ氏防長二國ヲ豊後ノ大友氏ニ

賜ハルノ浮説アルヲ以テ更ニ此命アリ

紀元二百廿九年

ト云フ。上同

十二年五月元就長府ニ出陣ス。大友義鎮盟約ニ背キ、豐前國門司城ヲ攻ムルヲ以テナリ。十二月廿三日、長府ヲ發シテ安藝ニ還ル。古文書

紀元二百卅二年

元龜二年四月二日、豐後兵赤間關ヲ來リ掠ム。擊テ之ヲ却ソク。上同

紀元二百卅六年

後陽成天皇天正十四年、豐臣秀吉將ニ薩摩ヲ征セントス。輝元ヲ以テ前隊トス。八月、

輝元長府ニ出軍シ、叔父吉川元春、小早川隆景及ヒ從弟吉川元長ヲ九州ニ差遣ス。

元春十一月十五日、豐前ニ卒ス。元長翌十五年六月五日日向ニ卒ス。弟經言其遺跡ヲ襲ク。後廣豐臣秀吉譜、江氏家ト改ム。吉川系圖

紀元二百四十年

十五年二月、秀吉自ラ薩摩ヲ討ツ。七月、凱旋ス。輝元安藝ニ還ル。豐臣秀吉譜、古文書

紀元二百四十八年

十六年三月、客年冬肥後亂ル。輝元豐前小倉ニ出陣ス。是ニ至テ亂平キシヲ以テ小倉ヨリ長府ニ至ル。尋テ安藝ニ還ル。上同

紀元二百五十年

十八年。輝元豐臣秀吉ノ命ヲ以テ分國ヲ
 檢地ス。本國七ツ半成ニテ。十三萬三千七
 百九十石ナリ。古文書
 文祿元年。秀吉朝鮮ヲ征ス。肥前名護屋ニ
 出次ス。七月。大坂ニ航歸ス。舟人與二兵衛
 逆ヲ謀リ。故ヲニ赤間關海ニテ其船ヲ暗
 礁ニ觸ル。秀吉殆溺ル。是時穗田元清ノ男
 秀元秀吉ニ謁セントシテ赤間關ニ在リ。
 飛舸之ヲ救フ。秀吉與二兵衛ヲ誅ス。是ヨ

紀元二百五十年

紀元二百五十年

リ茲ノ礁ヲ字シテ與二兵衛礁ト云フ。同上
及江氏家譜
 慶長五年。輝元關原ノ事ヲ以テ封土本國
 及七周防ニ賦ル。當時本國石高十三萬四
 千五十九石九斗九升壹合ナリ。内豐田豐
 東豐西及ヒ厚狹四郡ノ内ニテ。三萬六千
 二百石ヲ割テ。秀元ニ與フ。秀元始メ周防
 吉敷郡ヲ領ス。上宇野令長山ニ城ク。成ル
 ニ及ハスシテ此ノ事アリ。長府ノ串崎ノ

紀元二百三十二年

古城址ニ陣屋ヲ營造シテ之ニ移ル同及上

八年輝元山口ヨリ阿武郡萩ニ來リ城地

ヲ指月山ニ相シ二宮就辰信濃守佐波某善内

三浦元澄内左衛門尉佐竹元真三郎右衛門尉井上元

重五郎右衛門尉三上元友平兵衛尉ヲ以テ指月城普

請奉行トス三浦譜録井上譜録

九年十一月指月山ノ牙城成ル十一日輝

元山口ヨリ之ニ移ル江氏家譜

紀元二百三十四年

紀元二百三十五年

十年四月輝元上洛ス五月至ル新撰雜彙古文書

七月二日熊谷元直豐前守并ニ其女婿天野

元信五郎右衛門尉及ヒ中原某善兵衛尉三輪某八郎

カ居室ヲ圍ンテ之ヲ誅シ當時コレヲ御討果ト称ス天

野元信ハ山口ニテ其子元直カ一族熊谷

元實與右衛門尉同元吉太即右衛門尉元信カ一族天

野元因勘左衛門尉同元重彦左衛門尉以上四

賜テ祿ヲ及ヒ湯某二郎右衛門尉牧野某次郎右衛門尉カ

籍ヲ除キ國外ニ放ツ是事タル今春指月

城ノ二塚ヲ築クニ當リ家臣等助役ス益
 田元祥頭玄蕃同景祥修理亮カ奴僕熊谷元直
 カ受場ノ石ヲ竊取ス天野元信之ヲ捕ヘ
 益田カ家人栗山某三郎右衛門ニ附シ前二日
 ヨリ竊取スル所合數二千百荷ヲ償ハシ
 ム栗山曰ク當日ノ物ハ償フヘシ前日ノ
 物ハ確證アラサレハ償ヒカタシト是時
 宍道政慶五郎兵衛尉宍戸善左衛門尉等停調
 シテ千五百荷ヲ償ハシメントス元直等

聽カス元祥父子彼ノ僕ヲ誅シ其首ヲ元
 直等ニ檢セン丁ヲ乞ヒ且曰ク我ニ附ス
 ルノ盜既ニ其罪ニ處シタレハ石ハ償却
 スヘキ理ナシ此餘ハ上裁ヲ仰カンノミ
 ト是ニ於テ天野元信熊谷元實及ヒ中原
 三輪牧野佐波善内等連署ノ訴狀ヲ上ルコ
 レヨリ事結レテ解ケス元直夫妻佐波氏常陸介
 ノ隆秀女及ヒ元信閱閱ヲ憑ミ是ヨリ先キ屢
 輝元ニ犯觸ス輝元之ヲ啣ミ遂ニ此舉ニ

紀元千二百六十六年

十一年。指月城内ニ元就ノ香花所洞春寺

野家譜山縣家譜

ヲ建ツ。由來書故事年表

紀元千二百六十七年

十二年閏四月。輝元越前ニ如キ。中納言秀康ノ喪ヲ吊ス。五月。越前ヨリ至ル。押並年表

紀元千二百六十八年

十三年九月十三日。徳川氏松平ノ稱號ヲ

輝元父子ニ與フ。同上及接幕紀事

紀元千二百六十九年

十五年。是ヨリ先キ十二年ニ起リ三井元信信守。但馬。藏田元連與三兵衛尉ヲシテ防長兩國

ノ地ヲ檢セシム。コヽニ至テ成ル。現檢高

五十三萬九千二百八十六石七斗八升五

合ニテ。本國ヲ二十四萬三千二百四十六

石六斗七合トス。内五萬八千十二石十一本

石ト。毛利秀元ノ領地ナリ。檢地帳三井家譜藏田家譜

六

博古堂藏

紀三千五百七十年

十六年十二月廿六日秀就始ノテ江戸ヨ
リ至ル。江氏家譜

紀三千五百七十年

後水尾天皇慶長十七年十二月秀就江戸ニ

赴ク。

柳年表

紀三千五百七十年

十八年是ヨリ先キ現檢高ヲ幕老本多正

信

佐渡守

ニ告ク。正信曰ク。增高甚多シ。恐ラ

クハ石役ニ堪カタカラシ。幸ヒ頃隣國福

島正則

左衛門大夫

領内ヲ再檢セリ。之ニ准ス

ルニ如カスト。因テ備藝ノ檢高ニ照シ。魚

重元續

和泉守

ニ命シテ計算セシメ。コ、ニ

至テ幕府ニ上申ス。兩國ノ高ヲ三十六萬

九千四百十壹石三斗壹升五合トシ。内毛

利秀元ノ采地ヲ四萬七千八百二石六斗

四合。毛利就隆ノ采地ヲ二萬五千百五十

石。吉川廣家ノ采地ヲ三萬七千百二十九

石二斗三升トス。

届扣

紀三千五百七十四年

十九年德川氏大坂城ヲ攻ム。十一月十一
日。輝元出軍之ニ會ス。十二月和議成テ兵

山口縣史

卷之五

紀元二百七十五年

庫ヨリ至ル

新撰 雜彙

元和元年正月。客年秀就秀元德川氏ニ從

フテ大坂ニ下ル。コヽニ至テ大坂ヨリ至

ル。〔後人帳江氏家譜〕四月。德川氏再ヒ大坂城ヲ攻

ム。輝元ニ出軍セシム。輝元先鋒ヲ秀元ニ

命ス。五月一日。秀就出軍大坂ニ赴ク。〔古文書江氏家譜〕閏六月。三井就延〔善兵ニ命シテ永否〕

川成ヲ檢ス。〔三井家譜〕七月。秀就大坂ヨリ至ル。

〔江氏家譜〕十月十九日。粟屋元豐〔圖書〕所領美禰郡

紀元二百七十六年

岩永村ニ自裁ス。

〔事周防ノ部ニ見ユ。〕

家僕二人〔太即〕

〔右衛門飯田〕之ニ殉ス。

〔粟屋家譜風土注進業〕

十一月。

秀就江戸ニ赴ク。

〔故事年表〕

二年。秋風雨洪水稼田ヲ損ス。三井元信同

就延。志道保久〔五郎左衛門〕ニ命シテ之ヲ檢ス。

〔三井家譜〕是年。阿武川ノ下流ニ新川ヲ穿テ之

ニ通ス。〔天ト椿郷金谷ヨリモシリ原ヲ經テ中渡川トナレリ〕渡邊〔年表〕

三年。九月。秀就江戸ヨリ至ル。

〔江氏家譜〕

四年。三月五日。秀就江戸ニ赴ク。

〔故事年表〕五月

三日雲谷等顔没ス。七十等顔ハ肥前人原
 治兵衛直治ト稱セリ。初ノ畫ヲ狩野松榮
 ニ學ヒ其筆法ヲ得ル。後釋揚門本國人ト云フ傳
詳ナラス。按ニ齋藤等順カ父等開名ヲ永
門ト云フ。コレヲ詛ルカ如シ等順周防部
ユ。見ニ從ヒ雪舟ノ法ヲ得タリ。慶長年中
 能畫ヲ以テ輝元ニ仕フ。輝元大内家傳來
 ノ雪舟ノ軸本ヲ貸シ臨摹ヤシム。甚夕意
 ニ愜フ。是ニ於テ雪舟ノ舊址雲谷菴ノ地
 ヲ賜フ。因テ剃髮シテ雲谷等顔ト改ム。法

橋ニ叙セララル。子等益孫等與等爾等哲等
 藩相繼テ聲譽アリ。分レテ數家トナル。又
 畫脉ヲ承ケテ家ヲ起ス者ヲ三谷等宿仁
 衛門。栗栖等侲六兵衛後要津森等為茂兵衛波
 多野等有賢永富等珍左兵衛トス。原家譜繁
谷家譜三谷家譜津森家譜波八月廿五日
多野家譜永富家譜畫衆要略輝元吉見廣長大藏ノ萩平安古ノ郎ヲ圍
 ミテ廣長夫妻ヲ誅ス。今ノ平安古ヨシ
ニテ廣長初ノ長二郎廣行ノ轉訛ナリト云フ

山ノ系ノ人ノ事
 九
 博古堂藏

ト稱ス。モトノ石見國三本松ノ城主吉見
 正頼ノ男廣頼三河守ノ二男ナリ。征韓ノ役
 兄元頼二郎兵衛尉ト從軍ス。元頼軍中ニ病没
 シテ其後ヲ承ケ。壹萬餘石ヲ領ス。慶長九
 年十二月出奔ス。十八年歸國セリ。輝元正
 頼以來ノ功勞ヲ錄シ。出奔ノ罪ヲ宥メテ
 扶持ス。コヽニ至テ俄ニ誅セララル。時ニ年
 三十八歳ナリ。或云フ。廣長ノ妻妾相妬ム。妻其妾ヲ毒セント欲シテ。砒石ヲ買フ。廣長之ヲ知ラス。輝元ヲ招飲セント請フ。藥舖之ヲ聞テ。砒石ヲ賣ルヲ

紀三千五百七十九年

密訴ス。是ニ於テ輝元廣長ノ已毛利家譜
 ヲ毒スルトシテ之ニ及ヘリト。古文書古
 碑老口
 五年幕府福島正則ヲ放テ其城地ヲ收ム。
 隣國諸侯ニ令シテ兵ヲ國境ニ出シ。不虞
 ニ備ヘシム。輝元毛利元俱山城守益田元堯
 越中ニ兵ヲ附シテ岩國ニ出ス。秀元就隆
 出軍之ニ會ス。是時秀就將軍秀忠ノ上洛
 ニ隨フテ京師ニ在リ。將軍歸國ヲ命ス。五
 月六日京師ヨリ岩國ニ至ル。七月上洛ス。

山形縣史 卷之五 十 博古堂藏

古文書 廣島事 八月幕使土井利勝頭大炊 萩ニ來ル

山崎漫筆 輝元上洛ス。九月八日京師ヨリ山口

ニ至ル。尋テ萩ニ還ル。江氏家譜 新撰雜彙 是月秀就

江戸ヨリ至ル。江氏家譜

紀元二百十年 六年四月秀就江戸ニ赴ク。五月防長

洪水。山崎漫筆 八月渡邊廣太郎左衛門 三井就延ニ

命シテ川成崩入ヲ檢ス。三井家譜 古文書

紀元二百十年 七年四月秀就江戸ヨリ至ル。是年掟

書ヲ頒ツ。大記 録

紀元二百十年 八年三月秀就江戸ニ赴ク。無盡集 是年阿武

川ヲ浚ヘ。萩城三塚ノ東面ニ溝池ヲ穿ツ。

並表 幕府最上氏源五郎ヲ改易シ。其家老氏

家親定左近ヲ秀就ニ預ク。親定寛永十五年 萩ニ病死ス

其子度十郎 新撰雜彙 福岡 秀就ニ仕フ。 帳氏家家譜

紀元二百十年 九年正月明人陳元贊萩ニ來リ。輝元ニ謁

シ。長門國都誌ヲ編ス。長門國都誌序 九月十日是

ヨリ先キ秀就將軍家光ノ上洛ニ隨ヒ。コ

コニ至テ京師ヨリ還ル。無盡集 是月輝元防

長兩國ノ政事ヲ秀元ニ依頼シ、萩城ノ四

本松郎ニ隱居ス。無尽集大記録十二月、秀元江戸

ヨリ至ル。大記

寛永元年 秀就江戸ニ赴ク。

二年四月廿七日、輝元薨ス。天樹院塚内平安

寺ニ火葬ス。廢養學院舊地十リ、後四本松

テ之ニ五月、秀就江戸ヨリ至ル。天樹院ト名ツケ

六月二日、長井元房治郎左衛門尉輝元ニ殉ス。江氏

家譜幕使多賀左近來弔ス。江氏七月、

紀元二百四十年

紀元二百五十年

紀元二百六十年

秀元宗藩諸士ノ采地ヲ改定シ、熊野某兵

衛ニ命シテ兩國ノ地ヲ檢ス、現檢高五ツ

成ヲ以テ、六十五萬八千二百九十九石三

斗三升壹合ニテ、本國二十八萬五千二百

五十八石四斗四升九合ナリ。役人帳、檢地帳、熊野家譜

郡方十一月、秀就江戸ニ赴ク。無尽集

三年十月、是ヨリ先キ秀就將軍ノ上洛ニ

豫參シ、左馬寮ノ御馬ヲ賜フコトニ至テ

京師ヨリ還ル。江戸家譜故事年表

紀元二百十七年

四年二月秀就江戸ニ赴ク。故事年表

紀元二百十八年

五年十一月秀就江戸ヨリ至ル。同上

紀元二百十九年

六年二月阿武郡田萬村水谷浦ニ死鯨漂著ス。石見ノ飯井浦ヨリ之ヲ奪フ。コヽニ於テ國界ノ論起ル。我ヨリ三浦就房筑前守村井某傳左衛門龜井氏ヨリ勝田新之允佐相與兵衛出張シ。佛坂ニテ兩村ノ莊屋對決ス。飯井ノ莊屋ハ國界ヲ黑崎ト云フ。黑崎ハ水谷ノ西ニ在リ。田萬ノ莊屋古證文ヲ以テ國界ハ

紀元二百二十年

多々良崎ナルヲ證明ス。飯井ノ莊屋屈服シ。國界決定ス。大記録三浦家譜閏二月廿三日秀就將軍ノ上洛スルヲ以テ東上ス。是時將軍庖瘡ヲ病テ止ム。是ニ於テ大坂ヨリ還ル。十一月東上ス。故事年表

紀元二百二十一年

明正天皇寛永八年十月五日秀元國政ヲ秀就ニ還ス。故事年表九年三月秀就江戸ヨリ至ル。九月十六日江戸ニ赴ク。故事年表

紀二千九百九十五年

十年切支丹宗ノ徒ヲ檢ス。阿武郡福井村。

明木村。大津郡井上村。及ヒ吉敷郡山口ニ

其徒アリ。索捕シテ火刑ニ處ス。有故雜文。渡邊年表。

十一年四月秀就江戸ヨリ至ル。江氏家譜。廿九

日。萩古萩町火アリ。百卅郡方年表。渡邊年表。六月廿

日。秀就將軍ノ上浴スルヲ以テ東上ス。江氏

家譜。柿並年表。是ヨリ先キ白雉二羽。及ヒ斑毛鶉

ヲ本國ニ獲ル。之ヲ將軍ニ獻ス。渡邊年表。閏七

月。秀就京師ヨリ至ル。江氏家譜。十一月一日。萩

紀二千九百九十四年

紀二千九百九十五年

長壽寺。清光寺。今ノ准圓寺。火ク。郡方年表。故事年表。

十二年正月十九日。秀就江戸ニ赴ク。柿並年表。

渡邊年表。六月。幕府諸侯ノ參勤交代法ヲ定ム。

新撰以下參勤交代ノ事畧シテ書セス。其雜彙事故アリテ滯府シ。或ハ參勤ノ期ニ

違フ者ハ此例ニアラス。七月廿五日。大風洪水。指月城

破損ス。小箱舊記抄。八月十三日。兩國內大風。秋

稼ヲ損ス。渡邊年表。

十三年十一月。是ヨリ先キ。幕府古錢ノ通

用ヲ停ム。コ、ニ至テ新錢鑄造ヲ命ス。小箱

紀二千九百九十六年

紀三千五百七年

抄舊記

十四年正月美禰郡赤村ニ新錢ヲ造ル田

邊某市即左衛門佐々木某四郎兵衛叔某十左衛門ヲ以

テ鑄錢奉行トス葉原覺書十一月肥前島原ノ

民亂ヲ作ス幕府島原城主松倉三彌ヲ秀

就ニ預ク之ヲ平安寺ニ置ク柿並年表兵

ヲ島原ニ出ス島原事乃美家譜國司家譜藤井家譜志賀家譜横地家譜

是年幕府江戸城ノ天守閣ヲ修ス秀就

巨石四十枚長壹丈餘尺ヲ獻ス渡邊年表

紀三千五百十年

十五年二月四日秀就江戸ヨリ至ル幕府

島原ノ事ヲ以テ西國諸侯ヲ國ニ就カシ

ムルヲ以テナリ故事年表十八日島原賊

平ク島原事五月廿七日松倉三彌ヲ江戸ニ

送致ス福間帳是月幕令ヲ以テ兩國內ノ古

城址ノ石垣ヲ壞ツ有故雜文六月國內ヲ搜索

シ切支丹宗徒ヲ捕フ同上諸士ニ切支丹宗

ヲ信スヘカラサルノ誓書ヲ上ラシム其

料紙城内鎮坐宮崎八幡宮春日神社ノ午

王寶印紙ヲ用井シノ。兩社々人ニ寶印紙一枚錢二文ヲ以テ賣ルヘキヲ命ス。四社略

是年兩國內ノ耕牛多ク斃ル。渡邊年表

紀元二百九十九年

十六年阿武川ニ橋ヲ架ス。同上

紀元二百三年

十七年二月廿二日大津郡深川村大寧寺

火ク。寺社證文十一月廿二日幕府新錢鑄造ヲ

停ム。渡邊年表是年兩國內ノ耕牛多ク斃ル。故實

萃拔

紀元二百三年

十八年。總ラス。同上

紀元二百三年

十九年十二月廿五日幕命ヲ以テ兩國內

ノ民百七十八人。男九十四人。女八十四人。肥前天草

島原ニ移ス。小箱舊記抄。新撰雜彙。是年饑工。故實。萃拔。

紀元二百三年

二十年所務見取ヲ廢シ春定法ヲ施行ス。

一切伺書。兒玉家譜。二月廿一日陶工坂高麗左衛門

没ス。五十八歲。高麗左衛門初名助八朝鮮人ナ

リ。兄ヲ李勺光ト云フ。文祿ノ役我師ノ虜

スル所トナリテ大坂ニ來ル。豐臣太閤之

ヲ輝元ニ預ク。李勺光陶器ヲ造ルニ巧ナ

リ。因テ椿郷松木ニ宅地ヲ與ヘ。鼓嶽ノ樹木ヲ蜜新ニ充テ。磁器ヲ作ラシム。是ヨリ鼓嶽ヲ唐人山ト稱ス。後輝元ノ命ヲ以テ弟ヲ本國ヨリ招ク。即チ助八ナリ。寛永二年秀就今ノ名ヲ賜フ。コヽニ至テ終ル。李光ノ没年詳ナラス。山村家譜。子孫山村ト稱ス。坂家譜。後光明天皇正保二年七月廿七日。大風翌日ニ至ル。此日幕府長崎上使新見某七右ノ衛門船厚東郡藤曲ノ海上ニテ破損ス。福原元

紀元千三百五年

俊左近ノ家僕及ヒ浦人等之ヲ救フテ恙ナキヲ得ル。後日幕府銀子百枚ヲ贈リ之ヲ勞ス。録閱九月十七日。萩古萩居住岩倉某八郎兵衛發狂シ。隣家野山某六右ノ衛門力宅ニ抵リ。野山カ家族ヲ殺ス。是夜野山他出シテ家ニ在ラス。僕變ヲ野山カ武藝ノ弟子木梨就時喜左ノ衛門ニ報ス。就時之ニ趨ル。時ニ警卒野山カ宅ヲ圍ミ。人ノ出入ヲ禁ス。就時隣家ヨリ牆ヲ越テ入り。岩倉ヲ斫ル。三人

紀二千三百八年

者ノ食祿ヲ沒收ス。野山岩倉祿二百石。木梨ハ三百石ニテ共ニ

物頭タリ。就時後ニ野山岩倉カ宅。後日獄

収録舊地ヲ賜フ。舎ト十ル。沒収家筋帳。木梨家譜

慶安元年正月十八日。大雪十九日ニ至ル。

深サ三尺ニ及フ。素原閏六月再々古城址

ノ石垣ヲ壞ツ。雜有文故

紀二千三百九年

二年四月。萩田中一本松ノ亨德寺火ク。應

三年今ノ地ニ再建ス。今ノ田中神故事。社ハ本寺ノ鎮守社ノ遺レルナリ。年表

紀二千三百十年

三年七月廿五日。萩古萩火アリ。延テ濱崎

ニ及フ。素原八月十一日。是ヨリ先キ元年

月。幕府兩國ノ地圖ヲ作ラシム。コヽニ至

テ上ル。新撰十六日。夜東風海水暴漲ス。素原

覺閏十月三日。毛利秀元江戸ニ薨ス。三年末

紀二千三百十一年

四年正月五日。秀就卒ス。大照院江氏家譜六日。小

川就克。兵部信常就實。右京山名就行。内膳

祖式就好。主計村上就正。監物之ニ殉ス。江氏家

信常山上家譜九日。梨羽就云。頼母殉死ス。家

臣山本氏忠。又兵衛之ニ殉セリ。是ヨリ先キ

就云公務ノ果サ、ルアリテ、之ヲ辨スル
 カ爲ニ後ル。藩士及ヒ高賈ニ至ルマテ就
 云ノ死ヲ惜ミ、連名書ヲ以テ之ヲ止ム。就
 云聽カス。遂ニ死ス。古文書江氏家譜 十二日。
 又保宗又五郎左衛門 殉死ス。是ヨリ先キ宗又
 故アリテ流浪シ。石見ニ在リ。訃ヲ聽テ還
 リ殉死セン。ヲ願ヒ、明圓寺町ニ自盡ス。
江氏家譜 二月二十日。綱廣嗣久。江氏家譜 所務
 代官十八員ヲ置キ、治處ヲ分チテ管理セ

シム。コレヲ某宰判ト名ツク。曰ク。當島阿武
 内郡ノ曰ク。濱崎同。曰ク。奥阿武同。曰ク。前大
 津大津郡及ヒ。曰ク。先大津同。曰ク。美禰美禰郡
 郡。曰ク。吉田厚狹郡。曰ク。船木厚東郡。曰ク。山口。
 吉敷郡及ヒ。曰ク。小郡吉敷郡。曰ク。東佐波
 阿武郡及ヒ。曰ク。徳地同。曰ク。花岡都濃郡及ヒ
 佐波郡及ヒ。曰ク。上關熊毛郡及ヒ。曰ク。大島大島郡。曰ク。
 玖珂熊毛玖珂熊毛郡。曰ク。熊毛熊毛郡。曰ク。山
 代玖珂郡。十リ。役人帳 十二月廿七日幕

府國目付齋藤左源太蒞ニ來ル。渡邊是年始テ足輕以下ノ者木履ヲ穿ヲ禁ス。故事

紀三千三百十二年

承應元年七月幕府國目付江戸ニ還ル。江氏

家譜十一月郡奉行ヲ巡回セシメ箇條書ヲ

頒ツ。大記

紀三千三百十三年

二年三月幕府國目付石川弥左衛門蒞ニ

來ル。江氏家譜八月五日大風暴雨指月城破損

シ。兩國内ノ人家多ク倒ル。渡邊是年表廿六日國

紀三千三百十四年

目付江戸ニ還ル。江氏家譜十月十二日秀元ノ

子毛利光廣ノ遺跡ヲ分テ四萬石餘ヲ其

嫡男綱元ニ一萬石ヲ光廣ノ弟元知ニ領

セシム。元知清末村ニ居ル。系圖三十一月

吏ヲ汎遣シテ風雨ノ損害ヲ檢ス。大記

三年三月十六日蒞惠比須所火アリ。

惠比須社々傳六月幕府國目付能勢小十郎水野藤右衛門蒞

ニ來ル。江氏家譜十一月廿二日蒞城内滿願寺

三摩地院火ク。大記十二月國目付江戸ニ

還ル江氏家譜

紀元二千三百十五年

後西院天皇明曆元年幕府國目付石川彌左衛門石丸

石見 萩ニ來ル故事年表

紀元二千三百十六年

二年正月廿三日赤氣天ニ亘ル郡方年表三月

廿八日大津郡ニ死鯨漂著ス分附法ヲ定

ム蔵入ノ地ニ漂著スルニ分ヲ收メ一分ヲ浦人ニ與ヘ給領地ニ漂著スル一分

ヲ上納セシメ一分ハ給主ニ一分ハ浦人ニ與フ村里ヨリ浦人ニ助力スレハ浦人

ノ取分ツ大記八月大津郡大風上同

三年九月道路ヲ修シ其幅ヲ二間トス上同

紀元二千三百十八年

十一月吏ヲ汎遣シ各宰判ノ穀倉ヲ檢ス

上同是年量ヲ改定ス上同

萬治元年二月十五日渡邊宣吉之父仇陶

工山村松菴作之進朝鮮人李々光ノ子ヲ萩法花寺裏

門前ニ所殺ス宣父ヲ四郎左衛門常ト云

フ寛永十八年十一月法花寺ニ於テ松菴

ニ傷ラレテ死ス宣時ニ年甫二歳叔父俊

菴増宣カ成長ヲ俟テ父仇ヲ報セシメント

欲シ宣ヲ山口ニ匿シ自己ハ醫ヲ以テ安

紀元二千九百九年

藝ニ客寓ス。茲年常カ十七回ノ忌辰ニ當ルヲ以テ安藝ヨリ還リ。宜ヲ援ケテ松菴カ寺門ヲ出ルヲ要シテ宿志ヲ達セリ。大記

録渡邊 閏十二月。米價騰貴セシヲ以テ。和家譜。市貳石三斗五升ニ定メ。町年寄役ニ米ヲ下附シテ。貧窶ノ小民ニ賣與ヘシム。大記

二年。厚狹郡埴生村毎歲蝗害アリ。大唐米ヲ種セン。丁ヲ願フ。之ヲ許ス。上同 三月。郡奉行ヲ巡回セシム。上同 十一日。萩田町火アリ。

紀元二千三百二年

百九十九 四月。米價騰貴ヲ以テ雇夫ノ戸寺五宇。上同 賃錢ヲ改メ。雇夫鎌ノミヲ持參スル日別銀六分。鋤畚鉞ヲ持參スル銀七分トス。瓦葺夫ハ往年以來銀八分ナリシヲ。銀六分米壹升トス。上同 八月。旱魃。大豆皆無。上同

三年三月八日。萩城三郭内火アリ。毛利丹波郎失 火。延焼。上同 九月十四日。制法三十三箇条ヲ頒ツ。每歲正月十一日之ヲ讀知セシム。上同

寛文元年正月。兩國南邊ノ道路橋梁ヲ修

理ス。上同八月、萩及ヒ山口三田尻ニテ諸士

ノ別邸ノ山邊ニ在ルヲ收メテ立山トス。

上同閏八月、吏ヲ派遣シテ開作地ヲ檢ス。上同

九月、萩ニ金銀判座ヲ置ク。上同是年、始テ濱

崎宰判濱崎町鎮坐住吉神社ノ祭禮ヲ修

ス。年郡方表大津郡通浦ノ小童八人、淺田山ニ

テ白猿ヲ捕フ。萩ニ進呈ス。新錢二貫文ヲ

小童ニ與フ。時ニ綱廣江戸ニ在ルヲ以テ

之ヲ江戸ニ送致ス。明年綱廣携歸シテ淺田山ニ放ツ。大記

二年三月廿日、更テ春定并ニ檢見法ヲ施

行ス。上同七月廿一日、長府火アリ。三百古事

記是年、阿武郡鶴江臺ニ燈明堂ヲ建ツ。邊渡

表年

紀元二千三百三年 靈元天皇寬文三年正月廿八日、萩城三郷内

火アリ。十八大記三月二日、東條就類九郎

門ニ加祿ス。原祿四十石、加祿百十石。就類寬永十九年

小郡宰判所務代官トナル。意ヲ開拓ニ注

シ。萬治二年ニ至リ四千三百十石五斗九

紀元千三百廿四年

升ノ新田ヲ開キ長澤ノ池ヲ掘リ其他小
 郡嘉川白松秋穂陶等ノ諸村ニ池溝ヲ起
 シ旱損ノ患ナカラシムルヲ以テナリ土人
 餘澤ヲ仰キ近歲小祠ヲ長澤奉書東夏旱
 ニ創立シ就類ノ靈ヲ祭ル條家譜
 魃荻近村多クシイト云フ小獸ヲ獲ル菟
 ノ種類ニテサ、猫ト云フ獸ナリ蓋シ水
 ニ渴シテ村里ニ出シナラント云フ故實
 四年三月幕府朱印書ヲ改ムコ、ニ於テ
 豐田豐東豐西ノ三郡ヲ豐浦郡ニ厚東厚

紀元千三百廿五年

西厚狹氏ノ二郡ヲ厚狹郡ニ復シ大津郡
 ノ見島郷ヲ割テ見島郡ヲ立テ濱崎宰判
 ノ所管トス村覽文郷八月六日荻洪水指月
 城破換ス庚戸
 五年二國內ノ士民傳來ノ古證文ヲ檢ス
三藩及岩國故事年表
領ヲ除ク渡邊年表
 六年是ヨリ先キ大津郡向津具下村ノ小
 田ノ地峽ヲ中斷シ海路ヲ便ニセントス
 成ラスコ、ニ至テ廢ス故事年表

紀元千三百廿六年

紀元三百廿七年

七年二月十一日。萩城妙玖寺。擗火ク。年郡表方

七月。幕府巡見使。市橋三四郎。稻葉清左衛門。德永頼母。萩ニ

來ル。大記八月。海上見渡使。高林又兵衛。向井八郎兵衛。

來ル。年郡表方

紀元三百廿八年

八年二月。厚狹郡高泊ニ開作ス。三

月廿九日。榎本就時。遠没ス。就時ハ從五位

下元吉。中務大輔ノ三男ナリ。元吉嫡男ヲ元忠

ト云フ。父ニ先タナテ没ス。其子幼ナルヲ

以テ父ニ請ヒ就時ヲ立テシム。就時年甫

十八組頭トナル。寛永島原ノ役之ニ使ス

後。寺社勘定旗槍母衣等ノ奉行。及ヒ使番

ヲ支配ス。慶安四年。秀就ノ逝スル。就時ニ

命シ。綱廣ニ遺言ヲ傳フ。因テ東上シテ還

ル。幾ハクナラス。綱廣就時ヲ召シテ。目代

役トシ。目付ヲ就時ノ組ニ附ス。明曆三年

五月。當職ニ擢ラル。七年ヲ閱シテ。寛文二

年。二月。病ヲ以テ職ヲ辭ス。綱廣之ヲ允シ

テ。加判役トス。居ルヲ若干年請フテ罷ム。

コハニ至テ没ス。年六十四歳。就時識量群ニ絶ク。夙ニ毛利氏ノ式目規格一定ノ書ナキヲ憂フ。當職ト爲ルニ及ンテ舊記ヲ檢シ。斟酌折衷シテ制法ヲ作ル。萬治三年九月ニ至テ功ヲ畢ル。綱廣之ヲ頒行ス。萬治条目ト云フ。實ニ毛利家一代ノ大典ナリ。其ノ政ヲ執ル一ニ儉素ヲ尚ヒ。冗費ヲ省ク。是ヨリ先キ公廩頗ル困迫ニシテ。不虞ノ準備ナシ。堅田就政安房承應元年當職

トナリ。爲ス所アラントンテ果サス。就時就政ニ代ルニ及ンテ財政其ノ宜ヲ得テ。毎歳贏餘アリ。之ヲ内庫ニ納メテ準備金トス。僅々六年間ニシテ銀三千三百五十六貫文目ノ多キヲ致セリ。コレヨリ世々之ニ効フテ。贏財ヲ内庫ニ納ム。重就ノ時ニ至リ初メテ撫育方ヲ置キ。大ニ之ヲ増殖セシム。重就書ヲ作り子孫及ヒ有司ヲ誡メ曰ク。有心ノ者ハ言ハスシテ余カ此

ノ舉ヲ知ラント。數十年ヲ閱シテ嘉永癸
セノ歲トナリ。花旗國ノ使舶相摸ノ浦賀
港ニ突入シテ。天下ノ形勢忽チ變ス。爾リ
シヨリ來。敬親兵ヲ相ニ攝ニ出シ。官武ノ
間ニ周旋シ。礮ヲ鑄。銃ヲ購シ。巨艦ヲ造リ。
汽船ヲ買ヒ。夷艦ヲ馬關ニ攘ヒ。幕軍ヲ四
境ニ部ソケ。遂ニ王命ヲ奉シテ鳥羽伏見
ニ會來ノ兵ヲ敗リ。松山ヲ降シ。福山ヲ徇
ヘ。江戸及ヒ北越松前等ニ賊軍ヲ討チテ。

皇政一新ノ偉業ヲ贊ク。其ノ間ノ費用幾
許ソ。公廩ノ獨リ辨スル所ニ非ラス。多ク
之ヲ撫育ニ仰ケリ。而シテ猶刺金七十萬
兩ヲ朝廷ニ獻スルヲ得ル。若シ重就ノ孫
謀ナカリセハ何ソ能クコヽニ至ラン。而
シテ其ノ撫育ノ基ヲナス者ハ。就時與テ
功アリト云フヘシ。復本家譜
重就書付四月。秋風雨。
指月城破損ス。故事
年表九月。歲元ヲ高麗峠門
ノ西ニ移ス。モト
松ニ在リ。本
集雜



紀元三百九年

九年四月藩士食祿二百石已下ノ者困迫スルヲ以テ隨意ニ田舎間ニ移住スルヲ

許ス。渡邊年表八月萩洪水。同上十二月廿四日萩

古萩火アリ延テ土原ニ及フ。故事年表

紀元三百三年

十年五月幕府甲府ノ家老島田淡路同孫助ヲ綱廣ニ預ク之ヲ平安寺ニ置ク。後平佐某

阿曾沼其カ宅ヲ收メテ之ニ移ス淡路元祿十年閏二月廿三日死ス孫助ハ寶永六

年八月廿日免サル新撰雜彙渡邊年表

紀元三百卅年

十一年兩國内ノ耕牛多ク斃ル九月十日

之ノ檢スルニ其數凡テ四萬八千八百十

八頭ト云フ。故實年表十一月十三日萩松高院

火ク龍昌院ニ及フ龍昌院ハ秀就ノ室徳

川氏ノ香華寺ニテ其ノ中門ハ輝元豐臣

太閤ヲ招飲セシ時製造セシ伏見邸ノ物

ナリ柱扉共ニ金漆ヲ堆シ螺鈿ノ鳥獸花

艸ヲ嵌ス慶長十年本寺建立。本寺モト輝元ノ妾兒玉

氏ノ香花所トシテ建立ス當時周慶寺ト号セリ明曆元年徳川氏逝ス本寺ヲ其ノ

香花所トシテ龍昌院ト改メテ兒玉氏ノ香花西方寺ヲ周慶寺ト改メテ兒玉氏ノ香花

所ノ時中門トス世ニ青貝門ト稱ス之

ヲ見ル者精巧美觀ニ譽ノ移ルヲ忘ル故

ニ日暮門トモ字セリト云フ龍昌院由来書渡邊年表

延寶元年耕牛盡ク斃ル故實年表

二年八月十七日兩國内大風洪水渡邊年表是

年綱廣病ヲ以テ滯府ス是ヨリ歸國セス

故事年表

三年飢饉郡方年表

四年五月六日萩洪水郡方年表六月二日

紀元二千三百卅五年

紀元二千三百卅四年

紀元二千三百卅三年

紀元二千三百卅二年

地震コレヨリ日々震シテ月末ニ至ル郡方

年表

五年七月十五日紙幣札銀ト稱ス十種二分三分四分

五分壹分二分三分四分ヲ發行ス三家状

六年正月廿九日萩城三郷内火アリ郷外

ニ及フ三十八戸是年始メテ足輕者ニ名

字ヲ稱スルヲ許ス山崎漫筆

七年三月廿九日吉川廣嘉出萩ス頃日士

民困窮スルヲ以テ米壹萬石ヲ進納ス故事

紀元二千三百卅八年

表^年六月七日長井如閑^{治部右衛門}ノ三男與二
郎ヲ野山獄ニ下ス。如閑ハ輝元ニ殉セシ
次郎左衛門元房ノ子ナリ。家老福原廣俊
隱ト相惡ム。因テ曩キ^{四年十一月十八日}藩藉削
除ヲ乞フテ京師ニ寓ス。客年江戸ニ赴キ。
再録セラレシ^丁ヲ歎願ス。綱廣長井氏ハ
譜代ニシテ。且元房ノ故ヲ以テ之ヲ允ス。
本年ニ至リ赤川就直^{仁右衛門}綱廣ノ旨ヲ傳
フ。如閑不遜ノ語ヲ吐ク。因テ五月十七日

如閑ヲ邸内ニ幽ス。十九日ノ夜腹瀉シテ
死ス。其家族京師ニ在リ。京邸留守居ニ命
シ之ヲ收メシム。嫡男四郎。二男五郎^{名ハ政時}
家居セス。三男與二郎。四男八郎。并ニ如閑
カ妻及ヒ女子捕吏ニ抗ス。遂ニ縛ニ就ク。
之ヲ邸内ニ拘ス。其夜酒ヲ乞ヒ。謠ヲ唱テ
卧ス。翌日食ヲ與ヘントシテ之ヲ檢スレ
ハ。蚊帳内ニ母子枕ヲ並テ斃ル。獨與二郎
死セス。云フ昨夜毒藥ヲ仰ク。自己不幸ニ



シテ藥驗セスト。茲日京師ヨリ送致セリ。
 與二郎爾後記録スルナシ。蓋シ獄中ニ死
 セル十ラニ。四郎ハ上総國本納村蓮福寺
 ニ潛居ス。之ヲ告ル者アリ。九月江戶即ヨ
 リ士七人足輕八人中間五人ヲ遣ハシ之
 ヲ斬ル。廣俊モ家僕二人ヲ之ニ添フ。十三
 日四郎ヲ斬リ。十四日江戶ニ還ル。廣俊其
 首ヲ檢ス。五郎ハ名ヲ道喜ト變シ。廣俊ヲ
 狙撃セシトセシカ。跛者ニテ及フ。了能ハ
 ス。憤懣ノ餘。伊勢國四日市ノ河原村ニ無
 テ自殺ス。兄四郎カ死スルノ翌日ナリ。無
 集湯淺鈴川松岡山縣。廿七日。指月山要害
 井上高橋増原家譜。二震ス。
 年表。十月。幕府松平光長。越後ノ家
 臣永見長頼。大蔵ヲ綱廣ニ預ク。松雲院ニ居

紀元三百四十年

ク。致。九年。二月十九日。江戸ヨリ送。
 天和元年二月十日。萩山中町火アリ。延テ

濱崎ノ漁人町ニ至ル。二百六。渡邊。七月。幕

府巡見使。高木忠右衛門。服部久。來ル。上同。

紀元三百三十五年

二年二月廿七日。綱廣老ヌ男吉就立ツ。江

家。三月廿四日。萩平安古町火アリ。延テ。郡

内ニ及ヒ。蔵本ノ作事方。宮崎八幡宮。天樹

院。金剛院。妙悟寺。満願寺等ヲ焼ク。目付所

紀元三百三十二年

三年閏五月十四日。毛利元知江戸ニ卒ス。

十月廿八日天野景重藤内ニ死ヲ賜ヒ其

子權左衛門ヲ放シ景重カ組頭内藤就信

與三右衛門ヲ免ス景重萩海潮寺ニ死ス景重

ハ天野隆良ノ曾孫就信ノ男ナリ内藤就

信及ヒ組證人中丞政之左衛門疾ニ之ヲ

部ソケント欲シ爲ス所典刑ニ觸レ以テ

之ニ及フ景重人ト爲リ傑黥武幹アリ略

文事ニ渉ル其ノ自盡セントスル親族ヲ

以テ監吏ニ乞ヒ曰ク介錯人ヲ定ムル固

ナリ而レ氏カヲ盡シテ自ラ試ミント監

吏之ヲ許ス是ニ於テ筆硯ヲ求ソ絶命ノ

句ヲ作り之ヲ其子權左衛門ニ與フルノ

書ヲ附シ了テ廁ニ上リ盥嗽シテ本尊佛

ヲ一拜シ席ニ就キ套衣ヲ脱シテ禮キ三

方上ノ刀ヲ取り腹ヲ刺シ腕ヲ刺ス二回

氣管ニ中ラス刀ヲ墜ス搜テ之ヲ拾ヒ獨

言シ曰ク未タ切レサルナリト乃チ復夕

氣管ヲ按シ刀ヲ刺シテ刎斷ス鮮血淋漓

更ニ屈スル色ナシ。刀ヲ三方ニ置キ。兩手ヲ以テ之ヲ右側ニ安シ。徐々トシテ伏ス。

〔仕置帳。没収家筋帳。無尽集。天野家記。〕

紀元三三四年

貞享元年五月幕府與津忠頭久七ヲ毛利

元平ニ預ク。六月清未ニ送致ス。元祿三年六月廿六日死ス。幕府目付ヲ

下シ之。押並是年秋渡口ニ橋ヲ架ス。〔故事年表〕

紀元三三五年

三年田畠ニ厚薄ノ不同アルヲ以テ湯淺

直光小右衛門揚井春勝三之厚母就忠五郎右衛門

ニ命シ。田八五ツ成ヲ四ツ成ニ畠八石貫

十二文目ヲ十文目ト改テ。檢地ス。兩國石

高八十壹萬八千四百八十七石三斗七升

七合トナリテ。本國卅六萬七千七百七十

七石六斗六升九合ナリ。長府徳山領檢地ハ舊高ナリ。

紀元三三七年

東山天皇貞享四年春秋唐樋ヨリ三塚外ノ

堀ニ河ヲ穿ツ。新堀川ト名ツク。〔渡邊年表〕

紀元三三十九年

元祿二年閏正月幕府中根某傳三ヲ毛利

綱元ニ預ク。五年六月免ス。八月三末四月十

七日。綱廣江戸ニ卒ス。院泰巖綱廣幼ニシテ

畫ヲ能クス長シテ雄偉果敢武ヲ好ミ藩
 士ノ子弟器局アル別ニ俸ヲ與ヘ浮浪ノ
 武技ヲ以テ仕ヲ干ル又祿ス故ニ藩士ノ
 籍先代ニ増加セリ而シテ深ク意ヲ政治
 ニ注シ榎本就時ヲ任用シテ其能ヲ盡サ
 シム居常德川氏ノ分國安堵ヲ以テ輝元
 ヲ誘キ已ニシテ約ヲ變シ分國ヲ削奪セ
 シヲ憤リ且ツ豐臣氏ノ時輝元家康ト同
 シク大老ノ列ニ在リ其ノ子孫ニ至テ之

二屈下スルヲ耻チ江戸ニ在ル多ク病ニ
 托シ營ニ登ラス幕府其ノ越前中納言秀
 康ノ女ノ出ナルヲ以テ強テ問ハス性酷
 タ牛ヲ愛ス參勤交代ノ鹵簿中モ駿牛ヲ
 從フ世人嘲テ長門牛ト云フ固リ性ノ然
 ラシムル所トイヘ氏蓋シ亦之ニ藉テ以
 テ韜晦スルナリ東郊座右記
真蹟等參取
 四年吉就椿郷松本ニ東光寺ヲ建立ス由來

書

三十五五年

紀元三百年

六年四月吉就藩士ノ支藩主ヲ某殿ト稱
 スルヲ改メテ某様ト唱ヘシム。山崎漫筆七月
 十四日山田頼熙原江戸郎ニ自殺ス。頼熙
 字舜俞。幼名又三郎。復軒ト號ス。防府ノ人
 ナリ。幼時ヨリ書ヲ讀ミ字ヲ畫シ嬉戯ヲ
 喜ハス。五歳始メテ大學ヲ讀ム。或人問フ
 テ曰ク。兒ノ頃讀ム所何ノ書ゾ。熙答曰ク。
 大學。又問フ。書中何ヲ力述フ。曰ク。都テ是
 身ヲ修メ國ヲ治ルノ道。只恨ムラクハ未

タ之ヲ身ニ行フ。了能ハサルノミト。問フ
 者大ニ歎異ス。十一歳ノ時。父時頼体熙ヲ
 携テ京師ニ寓ス。後水尾上皇熙カ敏才ヲ
 聞キ。熙ヲ召シ詩ヲ賦セシム。熙直ニ一絶
 句ヲ賦ス。上皇其疾ニ成ルヲ以テ。或ハ宿
 構ナルヲ疑ヒ。詔シテ唐才子傳ヲ讀マシ
 ム。熙一字ヲ錯ラス。音吐清暢。一坐耳ヲ傾
 ク。上皇梶井盛胤法親王ヲ顧テ。此兒聞ク
 所ニ過ク。顔淵閔子騫今世ニ生レタリト

謂フヘシト。乃チ賞賜アリ。妙法院亮怒法
親王深ク熙カオヲ愛シ。伊藤坦菴ニ命シ。
熙ニ師タラシム。熙坦菴ニ事ヘ孜々倦マ
ス。坦菴五經ノ訓點ヲ改ム。熙其事ニ預リ。
討論虚日ナシ。坦菴カヲ盡シテ教授ス。十
二歳盛胤法親王ノ命ヲ以テ天台山ノ賦
ヲ作ル。半晷ニシテ成ル。凡テ八百廿字。延
寶七年吉就京師ヲ過キ。熙ヲ召シ見テ。其
オヲ奇トシ。携テ東下シ侍讀トス。時ニ年

十四歳ナリ。吉就一夜燕席ニ於テ蠟燭ヲ
刻シ。詩ヲ賦セシム。燭一寸ヲ消セスシテ
二絶句ヲナス。重テ命ス。則チ三絶句ヲ賦
ス。又七歩ノ詩ヲ命ス。六歩ニシテ成ル。吉
就歎賞シ曰ク。卿カオ曹子建ニ勝ル一步
ト。諸藩主熙カ名ヲ傳テ記ヲ作ラシムル
者多シ。十六歳高野ノ宿坊ニ遊フ。僧曰ク。
大師益田池碑ノ稿本。字體怪奇。讀ム者十
シ。子幸ニ爲メニ之ヲ讀メ。熙之ヲ讀ミ。且

其義ヲ説ク。凝滯ナシ。僧驚テ曰ク。若シ大
師ヲシテ之ヲ聞カシマハ。必ス子歳ノ子
雲ヲ得ルトセン。天和二年。朝鮮修信使來
聘ス。江戸本國寺ニ館ス。熙之ニ即テ酬唱
ス。使人深ク熙カ才ヲ奇トス。其國ニ歸ル
熙ヲ念フテ自ラ己ム能ハス。舟中書及ヒ
詩ヲ寄セテ別ヲ悵ムノ意ヲ言フ。是ニ因
テ熙カ名益加ハル。是ニ至テ享年終ニ二
十八歳。其死スル所以ヲ知ラス。或云フ。吉

就黄葉僧慧極ヲ寵信シ。東光寺ヲ建立ス。
熙之ヲ諫ム。吉就聽カス。其規模宏壯。且田
若干町ヲ寄セントス。熙憂悶終ニ之ニ及
フ。吉就悔惜。爲ノニ宿構幾分ヲ減セリト。

忠節事跡稿
山田家譜

七年二月七日。吉就江戸ニ卒ス。壽徳院四月

十三日。吉廣嗣ク。江氏家譜八月十八日。幕府國

目付萩ニ來ル。有文故

十年。幕府二國ノ地圖ヲ作ラシム。渡邊年表

記三十三百五十年

記三十三百五十年

山陽縣史 卷之五 博古堂藏

山陽縣史 卷之五

紀年三百五十八年

十一年三月三日安部春貞吉左衛門没ス七十

春貞父ヲ直貞ト云フ吉見廣長ニ仕フ廣

長慶長九年出奔ス直貞賈人トナル春貞

其二男ニテ幼ヨリ歌學ヲ好ミ延寶七年

江戸ニ遊學ス翌年網廣吉川維足ニ依頼

シ古今集ノ秘訣ヲ傳受セシム其年祿ヲ

賜フテ士籍ニ列セリ子孫歌學連歌ヲ以

テ業トス安部家譜九月松本川ニ始メテ橋ヲ

架ス故事年表

紀年三百五十九年

十二年幕府藩士ノ分限帳ヲ檢ス

紀年三百六十年

十五年五月萩土原ニ新道ヲ通ス黑澤繩

手ト字ス故事年表八月晦日洪水渡邊年表十月朔

日萩大風海潮簸揚成元ニ入ル故事年表是年

豆腐ヲ製造スルヲ禁ス同上

紀年三百六十年

寶永元年萩城ヲ修理ス柿並年表

紀年三百六十年

二年六月朔日萩洪水渡邊年表十月廿二日萩

火アリ平安古町ニ延ク故事年表

紀年三百六十年

三年六月廿五日萩大風雨渡邊年表是年川島

山陽縣史

卷之五

廿

博古堂藏

莊川島ヨリ長福ニ至ル間ニ堤塘ヲ築キ

椿郷西分濁淵ヨリ小松江ニ溝ヲ穿ツ同上

紀元三百五十七年 四年十月十三日吉廣江戸ニ卒ス青雲院 十

一月廿三日養子吉元襲ク江氏家譜

紀元三百五十八年 五年十二月十九日夜大津郡三隅下村ノ

野波瀬浦火アリ九十戸新撰

紀元三百五十九年 六年六月椿郷西分櫻江ニ橋ヲ架シ濁淵

ニ溝ヲ穿チ阿武川ニ通ス新撰 是歲救米

倉ヲ新建ス渡邊年表

紀元三百七十年 中御門天皇寶永七年七月幕府巡見使黒川與兵衛

衛岩瀬吉左衛門 來ル故事年表

紀元三百七十五年 正徳元年三月吉元江戸ニ参勤セントス

四日三田尻ニ抵ル幕府朝鮮修信使ノ來

聘スルヲ以テ吉元ノ参府ヲ緩シ赤間關

ニ接待セシム九日吉元三田尻ヨリ款ニ

還ル七月吉元豊浦ニ赴ク八月廿九日修

信使赤間關ニ來ル吉元之ヲ饗ス九月朔

日修信使出帆ス吉元三日ヲ以テ款ニ還

紀三十三

ル信使 廿六日 江戸ニ赴リ故事

二年二月 大津郡瀬戸崎浦火アリ

四月 在郷諸士ヲ萩ニ移住セシム 其食

禄百六十石以上ハ三箇年内 已下ハ五箇

年内ヲ期トス故事 八月九日 豊浦郡大風

秋稼ヲ損ス山崎漫筆 是歳稔ラス故事

三年二月二日 美禰宰判ヲ割テ吉田宰判

ニ隸シ 小郡宰判ヲ廢シテ船木及ヒ山口

宰判ニ隸ス役人帳 四月 客年凶歛ヲ以テ米

紀三十四

價銀札百文目ニ六斗トナル故事 七月十

三日 兩國大風 南邊尤甚シ春定檢見法 十月廿

三日 吉元長府藩主毛利元朝ヲ以テ嗣子

トシ 元朝ノ叔父元矩ヲシテ其ノ後ヲ承

ケシム 元朝名ヲ宗元ト改ム 享保六年吉

元ニ先チテ卒ス系圖

四年七月朔日 吉元志道就保丹 穴道就晴

藩玄ヲ罰シ 食禄ヲ削奪ス 是ヨリ先キ就保

江戸當役就晴國當職タリ 二人吉元ノ末

紀三十五

藩府長ヨリ入嗣シ。政事ニ熟セサルヲ幸トシ。財政ノ困迫ヲ隠シテ告ケス。既ニシテ諸士ニ課スルニ半知行ヲ以テス。吉元兩人ニ加祿ス。漸ニシテ兩人ノ不正ヲ覺リ。遂ニ本年二月十一日兩人ニ逼塞ヲ命シ。コ、ニ至テ就保カ食祿四千五百石ノ内二千五百石。就晴カ食祿三千五百石ノ内千二百石ヲ削リ。押隠居トシ。家督ヲ其子ニ與フ。柿並年表。故事年表。志道家譜。史道家譜。八月三日。大津

郡津黄村ノ海岸鳴動ス。九日ニ至テ止マズ。其夜海中ニ巨巖出現ス。字シテ立石ト云フ。故事年表

紀二千五百十五年

五年春阿武郡濱崎ニ松ヲ植ウ。度邊年表

紀二千五百十六年

享保元年閏二月廿三日。萩城三郷内火アリ。國司主計八月川島莊長福ヲ河添ト

改ム。幕府長福小次郎家重公ノ名字ヲ避クヘキヲ命スルヲ以テナリ。柿並年表九月

廿三日。小郡宰判ヲ復ス。役人帳十月三絃流

四十一

行入吉元内旨ヲ下シ之ヲ戒ム。故事是年

幕府海陸口留番所ノ所在地并ニ其ノ定

書ヲ録上セシム。渡邊年表

紀三千五百七十七年

二年二月七日阿武郡小畑ノ今浦火アリ。

八十九戸納上同四月幕府唐船追拂ヲ命ス

并表五月唐船豐前小倉ニ來ル十九日小

倉ヲ援ケテ之ヲ拂フ。新撰雜彙兒玉家譜村上家譜六月

幕府巡見使松平與左衛門衛門來ル。故事是年

萩江向ニ川ヲ穿テ川島ヨリ新堀川ニ通

紀三千五百七十八年

入渡邊年表

三年正月十二日幕府唐船事件ヲ以テ使

渡邊外記ヲ赤間關及ヒ小倉長崎ニ下ス是ニ

因テ吉元益田就高織部佐々木元氏舍ヲ赤

間關ニ根來元祐主馬ヲ大津郡向津具ニ差

遣ス。渡邊年表益田家譜佐木家譜根來家譜二月十五日唐

船小倉ニ來ル之ヲ拂フ。渡邊年表十九日唐船

向津具ニ來ル之ヲ拂フ。新撰雜彙廿五日堅田

廣慶安房益田就高ト交替ス。渡邊元太即左衛門

ヲ厚狹郡吉田ニ差遣シ。赤間關ニ應援セ
 シム。渡邊年表。益田家譜。三月廿日。毛利元
 矩江戸ニ卒ス。時ニ年十五歳。四月十三日。
 幕府元矩ノ十七歳未滿ナルヲ以テ遺領
 ヲ收メ。吉元ニ還附ス。系圖。渡邊年表。十五日。吉元
 毛利元平元子知ニ三萬八千石ヲ加ヘ。長
 府ニ移ス。元平後匡廣ト改名ス。同上。十六日。
 唐船赤間關ニ來ル。之ヲ砲撃ス。渡邊年表。八月。
 萩城ヲ修理ス。山崎漫筆。閏十月。改メテ足輕以

紀二千三百九十年

下者ノ木履ヲ穿ツヲ禁ス。故事年表。是年。
 萩城ノ北濱及ヒ新堀ニ松ヲ植ウ。故事年表。
 四年正月。是ヨリ先キ萩城三塚内ニ文武
 替古場ヲ創ス。コ、ニ至テ成ル。明倫館ト
 名シク。小倉實操尚齋ヲ以テ祭酒トシ。二月
 上丁始メテ釋菜ヲ修ス。小倉家譜。五月十八日。
 毛利匡廣初テ江戸ヨリ下リ。長府ニ入ル。
歸國客年ニ當ル。而シテ今年ニ三未
至リ暇ヲ賜フテ順番舊ニ違フ。年表。
 五年二月廿日。萩城三塚内火アリ。赤川勘

紀二千三百八十年

作事方延燒ス。年渡邊三月廿二日吉元毛利

匡廣ニ秀元以來分與ノ地ヲ與フ。三末年表渡邊

表年七月廿日島田孫助再ヒ萩ニ來ル。年十一

一月四日渡邊年表廿九日吉田宰判ニ隸スル舊

美禰宰判ノ地ヲ美禰宰判ニ復ス。帳役人十

一月十五日萩新堀ニ松ヲ植ウ。年渡邊是年

吉元永田政純衛瀨兵ニ命シ藩内ノ古文書

ヲ檢シ又井上親明衛武兵ニ命シテ一村限

明細繪圖石高附各村境目書及ヒ由來書

寺社由來書等ヲ錄上セシム。本原親明書ヲ

佐々木縮往ニ學フ喜テ狂書ヲ作ル傍ヲ

土偶ヲ製スルニ巧十リ。真跡及

六年萩城ノ北濱ニ松ヲ植ウ。年渡邊

七年六月廿三日兩國内風雨翌日ニ至ル

海郡作八年十一月三日赤間關火アリ。百三十渡邊

表年廿日川島莊河添本町及ヒ中町火ク。百

十同萩八町火アリ。百六十故事

紀元三百三十二年

紀元三百三十二年

紀元三百三十二年

山形縣史 卷之五

紀元三百八十年

九年正月廿二日萩城三塚内火アリ柳澤
火郵失塚外ニ延キ新堀ニ至ル渡邊六月廿

二日平安古火アリ九月十九日

新堀及ヒ河添中町火アリ二十是年

火災頻リニ起ルヲ以テ辻番兵ヲ置キ端

坊境内ニ火樓ヲ設ク故事

十年正月廿九日萩城三塚内火アリ國司

郵上同

十一年八月七日阿武郡須佐ニ唐船來泊

紀元三百五十年

紀元三百六十年

ス八日兵ヲ須佐ニ差遣ス十日又兵ヲ出

ス十一日是ヨリ先キ九日唐船ヲ砲撃ス

本日ニ至テ焼没セリ唐船打拂記兼重家

譜小笠原家譜兒王家譜檜是歳幕府人口

ヲ録上セシメ且ツ以テ往子午ノ歳ヲ以テ

之ヲ検査録上スヘキヲ命ス渡邊

十二年四月萩平安古安養寺北側ニ新道

ヲ作り又唐樋町ヨリ下土原ニ新道ヲ通

ス同上九月十六日逆罪人新五郎ヲ阿武郡

紀元三百七十年

山形縣史 卷之五 四十五 博古堂藏

紀伊縣史 卷之五

大谷ノ刑場ニ磔シ。其實父伊藤茂右衛門
カ新五郎ノ罪ヲ曲庇セシ。ヲ罰シ家祿ヲ
没收ス。新五郎ハ茂右衛門ノ二子ニテ。美
禰郡赤村居住坂藤右衛門ノ養子トナル。
養父其品行ノ修マラサルヲ戒ム。新五郎
養家ノ逐フ所トナラシテ恐レ。六月養父
及ヒ其妾ヲ斫殺ス。因テ士籍ヲ削リ。市ニ
肆ス。三日ニシテ磔罪ニ處セリ。帳仕置是
歳吉元彫工河治友父。六郎右衛門及ヒ河治友

紀三千八百十八年
紀三千八百十九年

周九權之ニ命シ鑄ヲ造ラシメ幕府ニ獻ス。
幕府其ノ精工ヲ賞シテ。銀五枚ヲ友父友
周二賜フ。友父等遠祖ヲ道祐ト云フ。文明
十八年大内義興ノ鑄ヲ造レリ。河治家譜大内義興
十三年六月十二日。萩洪水。渡邊年表
十四年四月十八日。大津郡瀬戸崎火アリ。
五百十上同五月十一日。赤間關火アリ。
上同六月十三日。萩蔵元火夕。故事年表十月廿六

紀伊縣史 卷之五 四十六 博古堂藏

山形縣史 卷之五

紀元二千三百九十年

日毛利師就父匡廣ノ遺跡ヲ嗣ク。弟匡平ニ壹萬石ヲ分與シ。清未ニ封ス。匡廣カ嘗テ請願セシ所ナリ。系圖三末年表

紀元二千三百九十年

十五年二月十八日。豐浦郡室津浦火アリ。戸百渡邊六月十八日。長府火ク。戸百同上十一月朔日。紙幣ヲ發行ス。上同

紀元二千三百九十年

十六年九月十三日。吉元江戸ニ卒ス。泰植院

紀元二千三百九十年

十月廿三日。宗廣嗣ク。系圖日帳

紀元二千三百九十年

十七年七月。蝗アリ。渡邊年表八月十二日。萩洪

紀元二千三百九十年

水。渡邊年表是歲大饑。同上。及周南文集。

十八年大ニ疫ス。當職毛利廣政後筑回郡饑

疫ヲ救濟ス。周南文集。毛利家譜。幕府ニ金二萬兩米

壹萬六千石ヲ借ル。渡邊年表二月。兩國內ノ饑

餓ヲ檢ス。正月以降十七萬七千五百餘ノ

多キニ上レリ。故事年表三月廿七日。毛利廣政

没ス。四十七歲。廣政ハ元就ノ六男元政五世ノ

孫ナリ。幼ニシテ考ヲ以テ稱セラレ。性簡

重純懿。學ヲ好ム。年十七八ニシテ國人自

山形縣史 卷之五 四十七 傳古堂藏

山形縣史 卷之五

シテ小松殿ト云フ。平重盛ニ比スルナリ。
寶永七年始メテ國加判トナル。コレヨリ
江戸國加判ニ出入シ。享保七年辭ス。居ル
三年當職ニ拜ス。在職七年病ヲ以テ去ル。
十六年吉元江戸ニ在テ病ム。廣政ヲ召ス。
到レハ則チ柩ニ在リ。留テ加判トナル。翌
年宗廣ニ從フテ歸ル。宗廣當職ヲ命シ。國
事ヲ委ス。廣政同列ニ讓リ。拜セサル者三
日。宗廣ノ託愈勤ム。終ニ命ヲ拜ス。是年凶

荒。本年大疫。餓莩滿路。廣政嘗テ政ヲ爲ス
時。建議シテ郡邑ニ社倉ヲ興シ。儲蓄以テ
饑饉ニ備フ。此ニ至テ倉ヲ發キ救濟ス。十
ニ二三ヲ支フ。乃チ府實ヲ出シ穀ヲ市フ。
會幕府ノ金穀ヲ致スアリ。廣政之ヲ得テ
益出シ濟フ。正月五日。彗ヲ發シ。郡邑ヲ巡
視シ。日夜居ラス。時ニ大雪。寒甚シ。人其ノ
少懋ヲ勸ム。納レス。拮据滋苦ム。廿九日還
ル。則チ病ム。病勢日ニ進ムトイヘ氏。牀褥

山形縣史 卷之五

四十八 博古堂藏

ヲ屏ソケ。僚屬ト日夜荒政ニ從事ス。没ス
 ルノ日猶安ニ即カス。醫ニ枕シテ正寢ニ
 絶セリ。周南文集 毛利家譜六月十八日佐々木縮往
 夫平太没ス。八十六歳縮往字沕真。藩醫佐々木道
 安ノ二子ナリ。經學文章ヲ以テ別ニ俸祿
 ヲ賜ヒ。儒員ニ列ス。業餘丹青ヲ能クシ。當
 時國內雲谷狩野ノ二派アルヲ知ルノミ。
 縮往始メテ明人ノ古蹟ニ法リ。自ラ機軸
 ヲ出シテ一家ヲナセリ。物茂卿縮往カ畫

至王竟十稔

年表邊

ヲ賞シ。王朝川文衡山ニ比ス。門人ニ井上
 親明張方平半歳アリ。方平鮭翁天然ト號ス。
 能ク師法ヲ守テ。畫ク所尤多シ。其款ナキ
 者ハ人以テ縮往ノ筆トス。佐々木家譜 九
 月廿七日阿武郡須佐浦火アリ。百十渡邊
 十二月大津郡向津具大浦火アリ。百餘戸上同
 是年赤間關火アリ。阿彌陀寺災ニ罹ル。
 十九年正月三日赤間關伊崎浦火アリ。百戸

紀王寬奉

二十年幕府兩國ノ産物ヲ録上セシム。宗

廣仁保義方珠烏田貫通智命シテ之ヲ

調査セシム。産物正扣圖注文産物付立産物以呂波奇産物方言産物帳

往復

紀王寬奉

櫻町天皇元文元年二月五日草場中章兵没

ス九十中章字豹臧居敬ト號ス肥前ノ人

ナリ能書ヲ以テ元祿十五年本藩ニ仕フ

或ハ云フ來舶清人ノ子ナリ書ヲ沽テ遊

歴シ本國ニ來ル巨筆ヲ背ニス偶吉廣大

紀王寬奉

照院ニ詣スルノ途上ニ見テ之ヲ異トシ

書ヲ作ラシム意ニ愜フテ祿セリト草場家譜

古老研十二月五日豊浦郡安岡浦阿武郡大

井村火アリ共二百餘年邊

二年十一月二日小倉實操没ス六十實操

尚齋ト稱ス藩醫小倉宗爾ノ季子ナリ襁

褌中足ヲ損ス長スルニ及ンテ足ノ人ニ

若サルカ爲ニ慨然憤起學ヲ修ム年甫十

六京師ニ遊フ居ル六年歸省ス吉就數召

紀元寛永八年

見シテ書ヲ講シ。詩ヲ賦セシム。元禄十二年學費ヲ賜ヒ。再ヒ京師ニ遊學ス。寶永三年吉就江戸ヨリ至ル。實操大津驛ニ謁ス。駕ニ從フテ歸ル。別ニ俸禄ヲ賜ヒ。儒負ニ列ス。享保四年明倫館祭酒ニ拜ス。祭酒實操ニ始マレリ。小倉家譜周南文集十二月九日赤間關火アリ。戸百渡邊年表三年六月朔日洪水。上同八月諸宰判ノ獵銃ヲ檢ス。

紀元寛永九年

四年四月萩城三塚ノ溝ヲ浚ヘ。北海ニ通ス。故事年表七月九日大樂朴水没ス。七十歳朴水初ノ村田平右衛門常樹ト稱セリ。狩野永真ニ就テ畫ヲ學ヒ。剃髮永伯ト號ス。吉就ノ禄スル所トナル。後ニ吉元ノ命ヲ以テ業ヲ養朴ニ受ケ。今ノ名ニ改ム。子探玄父業ヲ繼テ。法橋ニ叙セララル。大樂家譜是年宗廣藩士ニ家譜ヲ録上セシム。譜録事寛保元年正月廿三日萩城三塚内火アリ。

紀元千四百百年

兒王豐前

縣孝孺

助少

是春明倫館ニ石碑ヲ立ツ山

新撰雜彙

周南文集

七月十九日北海海嘯暴潮萩蔵元ノ

石垣ニ上ル

故事年表

是年萩城二墾外ニ松ヲ

植フ

渡邊年表

紀元二千四百二年

二年十一月四日萩大雪五日ニ至ル

故事年表

紀元二千四百三年

三年八月十三日大風萩市街ノ屋舎顛倒

ス

七十月渡邊年表

紀元二千四百四年

延享元年八月十日大風雨

上同

是歲中西國

紀元二千四百五年

蝗アリ。饑ニ幕府米穀ヲ回漕シテ之ヲ救

フ

遺塵抄

二年六月洪水

渡邊年表

七月十五日兩國内洪

水

上同

紀元二千四百六年

三年三月廿八日川島莊河添本町火アリ

五月幕府巡見使

上同

小幡又十郎板橋

民部伊奈兵庫

來ル

故事年表

七月廿四日目安箱ヲ設置シ

冤枉アル者ヲ訴ヘシム

故事年表

紀元二千四百七年

桃園天皇延享四年二月十四日阿武郡椿郷

紀元四百八年

西分大照院火ク。天樹院ノ堂宇ヲ移シテ
天樹院ト寺號ヲ改ム。大照院ハ秀就ノ菩
提寺ナリ。渡邊年表

寛延元年九月二日。兩國內大風雨。熊毛上

關大島ノ三宰判殊ニ甚シ。秋稼ニ萬餘石

ヲ損ス。書付扣渡邊年表是歲款城二墾ニ下馬場

ヲ設ク。故事年表

紀元四百九年

二年十二月。門戸ニ戸主ノ名字ヲ標セシ

ム。故事年表是年天樹院ヲ舊地ニ復ス。

紀元四百十年

三年大照院ヲ再建ス。

紀元四百十一年

寶曆元年二月四日。宗廣卒ス。觀光院四月十

二日。毛利匡敬長府ヨリ入りテ。宗廣ノ遺

跡ヲ襲ク。名ヲ重就ト改ム。五月三日。重就

舊領ヲ男匡滿當時文ニ讓與ス。系圖三狀扣日帳

七月廿八日。重就本日以降帳簿記錄ニ黃

紙ヲ用ウ。渡邊年表

紀元四百十二年

二年八月十二日。山縣孝孺没ス。六十歲孝孺

字次公。少助ト稱ス。周防右田村ニ生ル。因

テ周南ト號セリ。年甫十九父長白齋携テ
 江戸ニ往ク。贊ヲ物茂卿ニ執ル。茂卿始テ
 古文辭ヲ唱フ。和スル者蓋シ寡シ。獨安藤
 煥圖從フノミ。孝孺大ニ其學ヲ説ヒ。煥圖
 ト相切劘ス。茂卿モ亦其又ヲ得タリト稱
 ス。爾後茂卿ノ學日ニ興リ。海内風靡ス。居
 ルヲ三年。業成テ歸ル。正徳三年朝鮮修信
 使來聘ス。舟赤間關ニ至ル。吉元諸文學ヲ
 遣ハシ接待セシム。孝孺之ニ與ル。年尚少

シ。而テ諸書記ト。應酬敏捷。文才雋逸。韓又
 大ニ之ヲ賞異ス。對馬ノ文學兩森東賓ニ
 擯タリ。座次孝孺ニ交歡シ。目スルニ海西
 無雙ヲ以テス。三使孝孺ノ作ヲ睹テ。東ニ
 ヨリ特ニ孝孺ヲ請ヒ見ル。是ニ於テ聲名
 籍甚。是ヨリ後吉元ニ侍讀ス。宗廣重就ニ
 歷仕シ。陪從東西スル事多年。元文二年明
 倫館祭酒小倉實操死ス。孝孺代テ館事ヲ
 督ス。乃チ復東セス。既ニシテ祭酒トナル。

益學規ヲ立テ後進ヲ教育ス山根之清七郎

左衛門門字ハ子小田村公望伊介字津田泰

忠助字ハ子雅小倉實廉廉平字和智棗卿

九郎左衛門字ハ田坂長温茂七字ハ子恭

仲子由甚文右衛門字ハ子增野有原内記

子泉雲門林義卿周父東溟字ハ瀧長愷

彌八鶴臺山縣曾茂季八字ハ子波多野

字ハ貞父ノ若キ彬々輩出シ學ヲ以

テ世ニ顯ハル延享二年秋泄痢ヲ患フ明

年ノ春ニ至テ愈ヘス職ヲ辭ス聽サレズ

家ニ就テ病ヲ養ハシム孝孺尸位ノ毀ヲ

恐レ猶館中ニ在テ學務ヲ與リ聞ク寛延

元年懇請シ職ヲ退ク特ニ祭酒ノ俸秩ヲ

賜ヒ其身ヲ終ヘシム寶曆元年宗廣卒ス

孝孺之ヲ哀悼スルノ甚キ病益加ハル諸

老臣相諭シテ醫ニ京師ニ就カシム孝孺

辭スルヲ得ズ本年ニ至リ勉強京師ニ上

ル留ル丁三月病稍愈ユ秋涼ニ及テ復發

山口縣史 卷之五

紀三千四百三年

セシ丁ヲ恐レ乃チ七月ヲ以テ還ル無幾
復大ニ發シコノニ至テ終レリ。周南文集

紀三千四百四年

三年四月幕府令シテ諸侯高壹萬石ニ叔
千俵ヲ儲蓄セシム。渡邊年表
四年重就新紙幣ヲ製シ古紙幣ト交換ス。

紀三千四百五年

神並年表
五年八月廿四日大風雨。渡邊年表

紀三千四百六年

六年九月幕府吏ヲ長府ニ下シ砂糖製造
法ヲ按問ス是ヨリ先キ幕府長崎平戸ヲ

シテ砂糖ヲ造ラシム皆其ノ製ヲ得スシ
テ止ム既ニシテ本國及ヒ尾張多ク糖ヲ
出ス其品漢製ニ踰ユルヲ以テ乃チ此事
アリ蓋シ我ノ漢人ト密ニ貿易スルヲ疑
フナリ製造者秘訣ヲ盡シテ之ヲ傳授ス
明年四月ニ終ル本郡ノ砂糖ヲ製スルヤ
永富鳳ニ起ル鳳字ハ朝陽獨嘯菴ト號ス
安岡村ノ人ナリ京師ニ遊學シ山脇尚徳
カ塾ニ在リ會長崎ニ長慶ト云フ者製糖

山口縣史 卷之五 五十六 博古堂藏

法ヲ清入ニ受クルヲ聞キ、兄某ト同シク
長崎ニ赴キ、長慶ニ師事シ、其秘訣ヲ受ク。
後兄弟相ヒ分レテ、其ノ法ヲ本郡及ヒ尾
張ニ傳フ。鳳明和三年八月ヲ以テ没ス。十三

三渡邊年表
三家状和

紀元千四百十七年

七年四月、厚狹郡船木村火アリ。

紀元千四百十九年

九年六月十日、狩野察信没ス。五六十歳、察信ハ

永徳ノ裔ナリ。長府ニ仕ヘ、法橋ニ叙ス。子

ヲ俊信榮洲ト云フ。宗藩ニ徵サレ、氏ヲ長澤

紀元千四百廿五年

ト改ム。後ニ本氏ニ復セリ。分限帳長
澤家譜是歳

兩國神社帳ヲ幕府ニ上ル。渡邊
年表

十一年正月、萩弘法寺原ニ調馬場ヲ設ク。

上同三月六日、重就鑄工中井友恒善ヲ祿ス。

友恒父ヲ友幸善ト云フ。鑄工河治友恒左

衛ノ子ナリ。出テ中井氏ヲ襲ク。是ヨリ先

キ本國鑄ニ名アリ。友恒無比ノ良工ニシ

テ。傳世ノ刀法ニ新意ヲ加ヘテ、益長門鑄

ノ聲譽ヲ博セリ。中井
家譜六月幕府巡見使阿

紀元千四百廿二年

内記 秋原七十郎 來ル 故事年表 八月 兩國內ノ

小村帳ヲ改ム 渡邊年表

十二年夏旱魃 九月 重就萩城内土地

神社ヲ再建シ 元就輝元秀就ノ靈ヲ合祀

ス 毛ト春日神社ノ護摩堂ニ祀ル 故事年表渡邊年表

紀元千四百廿三年

後櫻町天皇寶曆十三年五月 重就始メテ撫

育方ヲ置キ 綱廣以來蓄積スル所ノ不虞

準備金ヲ増殖セシム 直書付故事年表 十月七日

萩城既火ク 渡邊年表 是歲小村廣狹平均檢地

紀元千四百廿四年

ヲ施行ス 檢地

明和元年十月三日 豐浦郡吉見浦火アリ

百戸餘 渡邊年表 是歲赤間關伊崎ニ開作ス 同上

二年九月十八日 吉田宰判ヲ分割シテ伊

佐宰判ヲ置ク 帳役人 是歲萩城三郷内深野

町ニ調馬場ヲ設ク 渡邊年表

五年八月十四日 指月山ニ震ス 同上

六年二月 重就小笠原長鑑 次郎 林以成 孫兵衛

衛ニ命シ防長古器考ヲ作ラシム 本書序

山ノ系

五ノ八

五ノ八

傳古堂藏

山口縣史略 卷之五

聖二千四百三年

七年四月重就土地神社ノ社號ヲ願フ仰

德大明神ト宣下アリ傳社是歲硝藥庫ヲ阿

武郡椿郷東分小畑ニ建ツ渡邊

年表

山口縣史略卷第五終

明治十五年十月七日板權免許
明治十六年一月出版



著者

山口縣士族

近藤清石

周防國吉敷郡山口
八幡馬場十番地居住

同縣平民

出版人

宮川臣吉

周防國吉敷郡山口
中市町六番地居住

